

# 精神障害者フリースペースにおける 『居場所の言語化』の必要性

～愛知県江南市の事例を通して～

三 橋 真 人

## I. はじめに

2000年以降、わが国の社会福祉のあり方が大きく変化した。障害者福祉分野の政策も大きく変化した。2006年4月障害者自立支援法が施行された。同年10月からは社会復帰施設などの新サービス体系への移行が開始された。

障害者自立支援法の要点の一つに、「就労支援の抜本的強化」があげられて、「新たな就労支援事業の創設」「雇用施策との連携」が盛り込まれたことにより、就労支援を巡る議論が活発になっている。

就労支援は重要である。障害者自立支援法が施行から10年を経て、就労支援に偏り、一方その重要性が認められてきた「地域生活支援」が後退した。その一例として「居場所」事業の衰退が挙げられる。精神障害者福祉では居場所事業の存続が課題となっている。

元々、精神保健福祉法が定めた精神障害者社会復帰施設（障害者自立支援法成立により廃止）の「精神障害者地域生活支援センター」が精神障害者の居場所支援の一部を担っていた。障害者自立支援法以後、その事業が、地域活動支援センターI型へ制度移行となった。しかし、地域活動支援センターI型が事業費の縮小傾向、アウトリーチやフリースペース機能など

のサービス低下、職員配置基準の縮小、業務量の増加、地域間格差などの課題が全国精神障害者地域生活支援協議会により明らかにされた（2009）。林（2007）、栄（2008）、郡山ら（2009）、東ら（2010）も同様の指摘をしている。加えて、これまで一体で運営されてきた「居場所」と「相談支援」の機能が分離されたことを問題視し、障害特性やニーズに合っていないなどの指摘がなされている。こうした状況を反映してか、「居場所」と「相談支援」の一体的な運営展開と、それぞれ独立した事業発展を求める機能分離の両論が拮抗しており、どちらか一方を強化すればもう一方の実践が低下する可能性があることが確認されている（萩原，2016）。

富田（2012）は「居場所事業がサービスという受給関係で、言い換えられてから、緩やかでかつ、つながりをつくるという目的の居場所はサービス（市場原理）になじまないものとなり制度の枠から外された。外されたから、なくていいのか、という課題提起は、地域福祉の側からはずっと、されてきたし、そういった実践もあった。反面そういった社会基盤の崩壊で、更に、貧困化とともに、逆に仕掛けて居場所づくりを行うことの必要性が声高に言われるようになってきている」ことを指摘している。確かに、精神障害者の自立や地域生活支援を行ううえで、「居場所」の提供という支援について、精神保健福祉従事者の間に、必要性の共通認識はあるが、言語化して理論化し実践に活かすことができていないのではという疑問がある。

富田（前掲）が言うように「声高に言われるようになってきている」ことは確かだが、それを抑えようとする動きがある中ではそれだけでは不十分である。居場所の事業としての存続を明確に打ち出す、事業としての概念定義が必要である。筆者はこれを「居場所の言語化」という。

本研究の目的は、愛知県江南市にある精神障害者フリースペース「ハートフレンズ」の活動を素材に取り上げることで、精神障害者支援のための居場所の言語化の一片が見えてくるのではないかと考え、居場所研究の方法論の試案を提案することである。

## II. 精神科リハビリテーションでの居場所の位置づけ

日本における精神科ソーシャルワークの起源は、1948年、千葉県市川市にある国立国府台病院（現：国立研究開発法人・国立国際医療研究センター国府台病院）に社会事業婦が2名配置されたところから始まると言われている（大野，2014）。1950年代後半から、先進的と言われる精神科病院に精神科ソーシャルワーカーが雇用されるようになった。その背景には精神科リハビリテーションへの期待があった。同時に、精神保健福祉従事者の間では、薬物療法の開発により、社会復帰（Back to the community）の期待も高まり、精神保健福祉従事者の間では、精神障害者支援のためには、居場所の存在の必要性和重要が言われ始め、今日に至っている。ここでは居場所概念の定義を「精神科リハビリテーションの分野」で、代表的なものを取り上げ、整理する。

谷中（2000）は、1970年代から地域で精神障害者を支える必要な要素として「憩いの場、働く場、住む場が必要であり、できる限りこれを地域に分散させ、中心的機能を憩いの場が持つとよい」と提言して、居場所の重要性を述べている。

乾（2014）は「仲間づくりがリハビリテーションの鍵。精神疾患のリハビリの中で最も大切なのは休養である。一に休養、二に勉強（病気について、休養の仕方、病気とのつきあい方、薬について）、三が遊びで、四が仕事」と提唱している。

中澤（2006）は「精神障害者の地域生活支援について、地域に最も必要なのは、たまり場、遊び場だ。気兼ねなく集まってきて、おしゃべりして、帰っていける。ややルーズな構造の場所」が必要であることの提唱をしている。

吉川（1998）は地域精神保健福祉活動の視点について「こころの健康を損ないつつある人に関わる人を育てること、そして、これらの人が気楽に

集まることが出来て、ちょっと人生の足踏みができるところを作ること」と提言している。

四者の考えを整理する。居場所とはどんなものか、その「描き」はある程度共通している。憩い、休養、たまり場、遊びの場、気軽に集まる場であり、開放的で自由、非拘束性、非目的性、非介入性があげられる。但し、他方で四者とも居場所は「憩い・働く・暮らしの中心的機能『目的のような何かの仕事のため、〇〇のための休養』、『ルーズな構造の場』、『人生の足踏み』、さらに『相談事業と一体的に』」など明らかに目的や拘束や介入が提起されている。

その特徴は「自由」それ自体を非拘束・非介入で守るという状態像である。それらを、「〇〇から守る、解放する」「〇〇のために」という目的のために位置づけている

両者は矛盾しているように見えるが「〇〇から解放」されるために「自由な」居場所を、という統合した展開になる。しかし、この定義は、「〇〇からの解放を必要な人」と居場所対象者を限定しており、かつ「〇〇からの解放」に向けた居場所の取り組みを期待したり、「〇〇が解放されたら」居場所は必要なくなるなど、「自由」を守ること自体に目的を置くのではなく、他の目的に従属した居場所概念の範疇に入らざるを得ない。

果たして、この定義は実態を包摂できるものであるのか、筆者は矛盾しない定義の検討が必要ではないかと考える。このような矛盾が現場ではどのように現われているのか、ここでは愛知県江南市にある精神障害者フリースペース「ハートフレンズ」の活動で検討し仮説の提起をしたい。

### Ⅲ. 居場所への思いの事例

九九

#### 1. 「思い」の収集方法

- ・調査対象：愛知県江南市にあるフリースペース「ハートフレンズ」をとりあげる。

・調査方法：参与観察、記録

第1回目から直近の記録を調査した。活動の中心を担う精神保健福祉ボランティアが記録を担当している。その週の担当者が、その日の参加者名簿、会の様子、参加費やお茶菓子代等の支出等を記録に残している。本論文では、その中で、「利用者の思い」、「スタッフの思い」、「関係機関の職員の思い」が書かれているところを全て抽出した。その上でKJ法を用いて分析を行った。

- ・倫理的配慮：記録を分析させていただくにあたり、ハートフレンズ運営委員会の議題にかけて許可を得た。論文の作成以外に使用しない、守秘義務を守る、論文が公表されたら、運営委員会に報告をする。
- ・筆者が「ハートフレンズ」を素材にした理由は、筆者が立ち上げから関わっており、記録類が全てそろっているからである。

## 2. 事例紹介

愛知県江南市にある精神障害者フリースペース「ハートフレンズ」は、運営委員会方式の法外事業である。2007年9月に、精神障害者の居場所づくりを進めることを目的に、精神障害者本人とその家族、江南保健所・江南市役所・江南市社会福祉協議会・しらゆりワーク（就労継続支援B型事業所）・愛知江南短期大学の教員などの支援者、そして、地域住民などによる精神保健福祉ボランティアたちが集まり、居場所づくり運営委員会をつくったことにはじまる。

具体的には、精神保健福祉ボランティアが、支援者の中心的な担い手となった。運営費は社会福祉協議会のサロン事業費で賄い、会場は、市内の短期大学のサテライトキャンパスを借りて始まった。

活動内容は次の通りである。

## 三 橋 真 人

表 1. ハートフレンズの活動内容

*活 動 日：毎週金曜日。12：00～15：00。
*場 所：愛知江南短期大学サテライトキャンパス「愛栄プラザ」
*活 動 目 的：サロンのような場（地域で、心の病を抱えている人たちが、安心でき、ほっとできて、元気に暮らすきっかけづくりを見つける場）。
*参 加 費：お茶菓子代 100 円
*プログラム：なし。匿名参加・実名参加の両方可

注)「愛栄プラザ」が老朽化し、維持が困難になったため、2016年4月より、江南市老人福祉センター2階(和室)に変更となった。それにともない、毎週金曜日は従来そのままだが、開催時間が13：00～16：00に変更となった。

表 2. ハートフレンズ 8 年間の参加者実績

年 度	平成20	平成21	平成22	平成23	平成24	平成25	平成26	平成27
参加者延人数(人)	1,515	1,238	1,291	1,195	1,335	1,250	1,147	1,250
回数(回)	50	51	50	51	50	50	51	50

\*人数は延べ人数、回数は開催回数。平均 25.4 人

## IV. 結果

### 1. 思いの類型化

KJ法の結果、ハートフレンズの意義について次のように類型化することができた。下記の枠内の片カッコはVI章「巻末資料」の発言の通し番号に対応している。

表 3. カテゴリー化

<p><b>【参加者（当事者）（1日の利用者平均 25.4人）】</b></p> <p>▶話をしたい、話を聴いてもらいたい。…… 1) 3) 5) 15) 18) 26) 29) 37) 42) 45) 48)</p> <p>▶孤独からの解放。…… 14) 27) 28) 32) 33) 34) 35) 36) 39) 41) 53) 54) 66)</p> <p>▶居心地がいい、のんびり、リラックスできる。…… 2) 4) 10) 23) 25) 30) 31)</p> <p>▶みんなの居場所だから、自分たちも居場所づくりの役割を担う。 …… 6) 11) 12) 13) 21) 46) 47) 49) 50) 51) 52) 55)</p> <p>▶ハートフレンズは問題解決をする場ではない。個々のニーズに合った場所を利用する。ハートフレンズに全てを求めてはいけない。…… 24) 44) 59) 61) 62)</p>
--

## 精神障害者フリースペースにおける『居場所の言語化』の必要性

- ▶ フリースペースに来たことで生活・活動範囲が広がった。○○したいという思いが出てきた。⇒寄り道、バザー参加。

…… 7) 8) 9) 16) 17) 19) 20) 22) 38) 40) 43) 57) 58) 63) 64)

- ▶ 匿名性があるから話しやすい。…… 60)

- ▶ 保健所のデイケアクラブとハートフレンズは違う。…… 65)

### 【ボランティアスタッフ（約10名）】

- ▶ ボランティアという立場として精神障害者に対する関わり方の戸惑い、迷い、揺らぎ。距離のとり方。

…… 9) 10) 12) 14) 16) 17) 19) 20) 21) 22) 24) 26) 28) 29) 33) 34) 45) 46) 48) 52)

↓ 精神障害者に対する関わり方の悩み

- ▶ ハートフレンズ（居場所）の意義や意味について悩む。参加者が居場所に来る意味は何か悩む。参加者に満足してもらっているか考える。

…… 4) 23) 30) 31) 36) 37) 38) 39) 40) 50) 51) 55)

↓ 精神障害者に対する関わり方の悩み

- ▶ 参加者が求めている「求め」と「望み」に応える兼ね合いが難しい。何かしてあげたいという思い。

…… 1) 7) 13) 15) 18) 25) 32) 43) 47) 53)

↓ 精神障害者に対する関わり方の悩み

- ▶ ボランティアのフォローアップの必要性和、実際にボランティアをしてくれる人が増えないという悩み

…… 3) 5) 8) 27) 35) 41) 42) 44)

↓ 精神障害者に対する関わり方の悩み

- ▶ 『案ずるより産むが易し』…「参加者がいろいろとやってくれる。

…… 2) 6) 11) 49) 56) 41) 42)

### 【関係機関スタッフ】

- ▶ 要支援者に対する連携のしやすさ（精神障害者家族、江南保健所・江南市役所・江南市社会福祉協議会・しらゆりワーク（就労継続B型事業所）・愛知江南短期大学の教員などの支援者など関係機関で協力し合ってきた成り立ちゆえのもの）

…… 1) 3) 4) 5)

- ▶ 江南保健所管内での交流活動計画（平成27年7月実施）保健所、各市町役場、各市町社会福祉協議会、管内のフリースペース、主に精神障害者を対象とした各事業所、家族会、精神保健福祉ボランティア団体など。

…… 7)

- ▶ ハートフレンズの実践の定期的な評価作業が必要。

…… 6)

- ▶ 当事者が選べる社会資源が一つ増えた。

…… 2)

注）本研究ではKJ法分析について、参加者（当事者）、ボランティアスタッフと関係機関スタッフを分けてカテゴリー化の作業を行った。理由は、参加者（当事者）、ボランティアスタッフ、関係機関スタッフの三者で、居場所に対する思いが異なるという仮説を立てたからである。そして、三者の思いの違いを明確にできるように考えた。

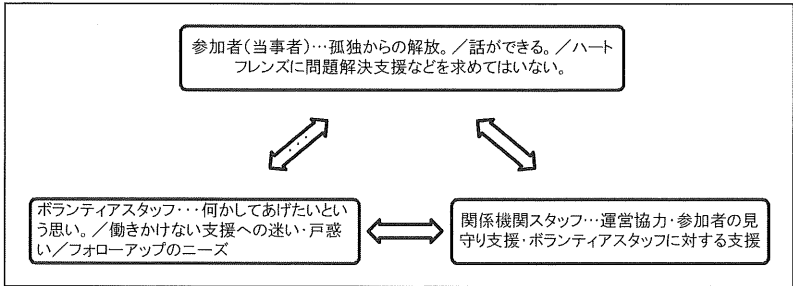


図1. KJ法に基づく、ハートフレンズ関係者の相関図

## 2. 思いの整理

- ・「何かを求める」という目的がない人。
- ・「何かを求める」ということはなかったが、何かを得た人。
- ・「何かが漠然とある」がそれを求めてきた人。
- ・「何かが明確にあってきた人たち」。
- ・何かを求めて来て、それが満たされなくても来る。
- ・問題が解決した後も、来所し続ける。
- ・就職した後も、来所し続ける。

フリースペースの参加者は「参加すること」に意義を持っている。しかしながら、ボランティアスタッフは、何かをしてあげたいという思いが強い。関係機関スタッフは、そのギャップを意識して、ボランティアスタッフのファシリテーター役割を担う。その三者間の構造を持っている（図1）。

## V. 考察

九五

これらの分析から、「〇〇からの解放」、「〇〇からの自由」あるいは「〇〇のために自由を」というものだけでは居場所は論じられない。居場所にはそれら以外に、新しい世界として居場所が持つ役割が言えるのでは



ないか。

今回の KJ 法の分析では、「孤独からの解放」というキーワードはある。「話がしたいという」というキーワードがある。しかし、「ハートフレンズは問題解決の場ではない」というキーワードがある。つまり、話をしたいという思いは、セルフヘルプ・グループやピア・カウンセリングを求めていることとは異なるものと考ええる。ゆっくりできる場であり、セルフヘルプ・グループやピア・カウンセリングの責任や義務はないということである。ピア・カウンセリングは、支援を受けたら、支援を返すという相互支援の文化がある。相互支援の文化があると、のんびりしたり、寝ていたり、一人でいたり、自由にはできない。参加者はゆっくりできるというキーワードがある。「話をしたい」と「ハートフレンズは問題解決の場ではない」との矛盾するキーワードに注目しなければならない。参加者が「話がしたいという」という思いは「他者との対話を通して、自己客観化する作業や、自己の気づき、自己内省化作業」に意義を見出しているのではないかと考える。

この点は、ボランティアスタッフの悩みでも出ていた。何かしたいけれど「何か」を本人は持っていないのでは、あるいはわからないならば、支援できないという悩みがでる。しかし、ボランティアスタッフは、居場所という場が、暖かく、ゆっくりできる場という場の環境作りを求められていると考える。

ボランティアスタッフは、ボランティアという立場として精神障害者に対して、どのように関わるようにすればよいのか、関わり方の戸惑い、迷い、揺らぎ、距離のとり方などに悩んでいる。それを解決するために相談できる専門職の存在を必要としている。さらに、傾聴力を向上させたいという思いもある。熱心に関わることで、フリースペースの意義に悩むことも多い。現状維持でよいのか、変化していくべきなのか悩んでいる。

働きかけない支援もあるということを伝えるために、居場所に専門職がいる必要があると考える。

関係機関スタッフは、参加者から相談にのって欲しいとか、何かをしてほしいとは求められていない。むしろ、関係機関スタッフは、居場所づくりをきっかけに連携と協働がより深まったと実感している。結果論として、顔の見えるネットワークができたという効果はあった。また、関係機関スタッフは、ハートフレンズの評価と点検は定期的に必要であることを述べている。但し、それを参加者が求めているかといえばそうではない。

もう一つ重要な特徴がある。以上のような記録分析から、「自分の病気（精神疾患）のことや、（精神疾患を発症して）今までの苦悩に関する言及」が出てこない事である。精神障害のために、日中活動・家庭（暮らし）・地域生活のすべてにわたって「生活のしづらさ」があり、そのような話が出てきてもおかしくないと思われるのだが、それが無い。ピア・サポートやセルフヘルプ・グループのような文化が、居場所にはない。居場所は「助け合う、支え合う、助けたら、助け返すという相互支援を行わなければならない」という義務や責任はない。この現象は、いち早く精神病院改革を行なったイギリスでの治療的ソーシャルクラブ（居場所）の活動でも同様であったことと一致している。

わが国の黎明期の精神障害者作業所の役割について、支援者たちは「居場所」としてきた。そこには脱精神科病院、入院からの解放の目標があった。その後、利用者の「ひきこもりからの解放」、「家族からの解放」、「働きたいというニーズ」に応え、さらに「地域交流の場」のように、作業所は多様な形態を持つことになり、機能分化していった。

居場所とは「ほっとする場」、「〇〇からの解放」等があげられているが、それだけではない。

実践上では、「長期入院等の出口」として、「労働や訓練に向かう人の入り口」として、「訓練や労働をしても必要な場」として、「家庭生活を持っている人にも必要な場」として存在している。精神障害者福祉にとっては、どのような状態にある人にとっても、必要な「場」として実践的には認められつつあり、その点から、精神障害者福祉にとっては、必須の社

会福祉事業であると考えられる。

居場所は、精神科デイケア、就労継続事業所、地域活動支援センター、ピア・サポート、セルフヘルプ・グループなどが提供できる機能とは、別の機能があると考えられる。

居場所にはプログラムはない。一人でぼつんとゲームをしている人もいる。ある人が何か（例えば、トランプなど）をしようと言ったからといって、みんなでトランプをするわけではない。ある人が、今度、遠足に行きたいと言って、そうしようとはならない。それが居場所である。居場所は、支援をする場、あるいは問題解決をする場ではない。しかし、働きかけない支援が支援になっていることに注目をしなければならない。

居場所という場は、「参加者が自己を内省する、自己を客観化する」ことに役立っているのではないか。

居場所が事業としての存続を認められていくには、居場所の定義化が必要である。筆者はこれを「居場所の言語化」という。改めて、すべての人にとっての必須事業として、居場所事業の存続のために「居場所の言語化」必要である。言語化ができることで理論化が可能となる。

## VI. 今後の課題

精神障害者の隔離収容政策を解消したイギリスなどでも、「居場所」の存在は重視されて今日に至っている。

私たち、健常者とと言われる者にとっても居場所が必要である。私たちの生活は、①日中活動、②家（家庭）の世界、③余暇の世界から成り立つ。健常者の人たちは、①日中活動、②家（家庭）の世界、③余暇の世界の中に居場所を見出す。但し、精神障害者の生活を考えるときには、①日中活動、②家（家庭）の世界、③余暇の世界に加えて、もう一つの性格の質の異なる世界、仮に「第4の世界」とする。つまり、第4の世界が必要なのではないか。その世界は、スティグマを持つ人たちが他人に気兼ねするこ

となく、自由に、常識より逸脱した行動や病的行動をとっても、また他の人たちも許容的にその行動を見ている雰囲気のある場を持つことの重要性であり、何もしないことが重要だ。第4の世界とは自己の客観化、自己の内省、自己の生き方の再構成を行う場ではないか。第4の場が居場所の機能であって、居場所はずっと支援として必要とされているのではないだろうか。

精神障害者に対する居場所の提供支援を考える場合には、「自由と開放」を求める利用者の吟味と、介入と目的性の付与の関係性の検討することが重要であると考えられる。

自由・開放・休養などのベクトルで考えると、「〇〇からの」となり、「〇〇」を意識した「中心的」「一番重要な」モノとなるはずだが、実際は違う。

精神障害者支援の歩みは、当事者の「孤独からの解放」、「苦しみからの解放」、「家族からの解放」のように目的を解決するために、様々な支援システムを作ってきたのではないか。目的が解決し、次に、新しい目的が出現する度に解決する手段を作ってきたのではない。そのような歴史を繰り返してきたのではないだろうか。セルフヘルプ・グループ、作業所、クラブハウス、ピア・サポート、ピア・カウンセリング、ケアマネジメント、SST、WRAP、当事者研究等、精神障害者支援はこうして誕生、輸入されてきたのではないだろうか。

本研究は、精神障害者の居場所の研究手法の試案である。そのために本研究の意義は、研究の切り口を示すことである。そして、精神障害者にとって居場所はどのような意味を持つのか」仮説を生成することにある。居場所は、「参加者が自己を内省する、自己を客観化する」ことに役立っているのではないかという仮説を提唱したい。居場所は目に見えない支援を提供している。精神障害者の生活には、①日中活動、②家（家庭）の世界、③余暇の世界に加えて、もう一つの性格の質の異なる世界、仮に「第4の世界」とする。つまり、第4の世界が必要なのではないか。第4の世界と

は「参加者が自己を内省する、自己を客観化する」場であるのではないか。障害者総合支援法下では、目にみえない、結果がはっきりしないものは福祉サービスには相容れないものであり、福祉サービスとして認められない。可視化、数値化できないからといって、居場所がなくなっていくとはならないと考える。今後、本仮説を論証作業していくことが課題である。

## VII. 巻末資料

収集された事例－ハートフレンズに対する「利用者の思い」、「スタッフの思い」、「関係機関の職員の思い」－（複数回答）

### 【参加者（1日の利用者平均 25.4人）】

属性：精神疾患を抱える人（年齢：10代～60代。性別：男女。家族形態：親・配偶者など家族と生活している人、一人暮らし。活動状況：就労している人、就労継続支援 A 型・B 型で訓練中の人、精神科デイケアを利用中の人、自宅療養中の人など）

- 1) しゃべりたい、聞いてもらいたいという願いがかなう場所だと思う。
- 2) ハートフレンズは、「普通列車に乗っている感じだと思う……」。
- 3) 「話を聞いてくれる場所を求めていた、病院に行っても対処してもらえないためフリースペースは最適」と思う。
- 4) ふつうに話をして時間が流れて行くところだと思う。
- 5) 何かあった時に話をできる場所＝その日の出来事、自分の話を誰かに話せる場所
- 6) A 市の「B 会」は規則がある、ハートフレンズはないから良いのではと思う（※どうにもならない場合は別だけど）。
- 7) バザー活動があるのがよい。江南短大のバザーを楽しみしている。
- 8) バザー活動を行うときは、メンバーも一緒に制作活動したい。
- 9) 集まって話あいをしているだけでよいのかと当事者から。
- 10) 「リラックスして寝ていても怒られない」

### 三 橋 真 人

- 11) 知っている人がいればそばに行くことが多い。一人でいたら誰かが声をかける等、みんなで配慮していきたい。
- 12) 当事者も安心して来られる場所を探っている状態、みんなで作り上げていくため時間が必要。
- 13) みんなの居場所として運営していく際の雰囲気づくりを大切にしたい。
- 14) 自分も参加できている状態。
- 15) 妄想、幻聴のある人、体調が悪い人の場合についての対応では、「その人が一番悩んでいるため、話を聞くことを大切にしたい。フリースペースはそういう場所」だと思います。
- 16) 自分の中で毎週金曜日が定着してきた。1年経つと自然に会話できるようになったのはとても良い。
- 17) 参加者が企画を提案していきたい。
- 18) 当事者にとって、話し合いの場だと思います。
- 19) 新聞づくり、会報をつくっていきたい。
- 20) 傾聴講演会の計画についての話あいしたい（傾聴トレーニングしたい）。
- 21) 変化よりも今までの雰囲気で行ってきたい。
- 22) ハートフレンズ終了後、バロー（スーパーの名前）のフードコートでの寄り道が楽しい。
- 23) 参加していて居心地がよい。
- 24) いろんな相談事に対してハートフレンズは解決する場所ではない。（イメージ・期待してきた人に対する対応の悩み）
- 25) ハートフレンズの連絡事項、行事予定について口頭ではなく、文字化（チラシかホワイトボードに記入）して欲しい。
- 26) ハートフレンズに来るとストレス発散になる。心にたまったものを吐き出せる場所だと思う。
- 八  
九 27) 人と話すにしても母親のみしかいない。家族以外の人と話せるのは自分にとってはいい。
- 28) 人と関わることがないので、健康状態がいいのか悪いのか分からない。

精神障害者フリースペースにおける『居場所の言語化』の必要性

人と会うことで自分の体調が分かるのでよい場所だと思う。(顔色が悪いよだとか)

- 29) 参加者の人の意見を聞けるのでとてもうれしい。自分の知らないことをたくさん知っている人が多くて聞くだけで楽しい。
- 30) まだ来所して2回目だけど、落ち着ける場所だと思います。
- 31) やさしい人が多いので、不安にならずに参加することができる。
- 32) クリスマス会に、子どもを連れてきたけど、みんなが暖かく子どもと遊んでくれた。
- 33) 一人暮らしなので「こんにちは」や「さようなら」が言える場所。
- 34) 「こんにちは」というと「こんにちは」と言葉が返ってくる場所。
- 35) 家や近所に居場所がないので、ハートフレンズがあると助かる。
- 36) 両親が亡くなって、現在1人暮らし、ハートフレンズに参加して居場所(ハートフレンズ)があることがうれしかった。
- 37) 女性と話をする機会が少ないので、女性とお話しが出来る。ハートフレンズをきっかけにいろいろな人に話かけられるようになった、と思う。(当初からの変化)
- 38) 匿名の意見箱の設置(参加者の意見を聞く)、公には言えないから意見箱で要望を聞く。マイノリティの要素が強い。
- 39) 仕事を辞めても、帰って来られる場所。
- 40) ハートフレンズもグループとして他の団体と交流したほうがよいのではないかと思う。
- 41) 「まだやってた。よかった。」「時間内ぎりぎりに来たとき、ハートフレンズ必要性を再確認する。」
- 42) ハートフレンズは「いつ来ても同じ、ステップアップしない方針」、みんなで輪になって座談会のようなことをしてみてもどうか。
- 43) 他のフリースペースがどのようなことをしているのか等情報交換がしたい。
- 44) 個々がレベルアップしたいのであれば、就労支援施設等を利用して

三 橋 真 人

らうなど人に合った活動すればいいんだろうと思う。

- 45) 何も考えずに世間話ができる場所だと思う。
- 46) ハートフレンズ内で体調が悪くなったときに毛布があったらいい。
- 47) 慣れすぎて、自分の家と感じないようにすることも大切。
- 48) ハートフレンズ内で秘密を守れない人がいるので守ってほしいと意見があった。スタッフが「ここで話したことは外では話さないように伝える」対応をした。
- 49) ルールを作るのは簡単だが、みんなが背負いすぎるとも自由度がなくなり、制限が出るので様子を見ていけばよいのではないか。
- 50) 土曜日開催にしたら、利用者も広がるのではないか。
- 51) 50) の意見に対して、土曜日開催にしたら、利用者が変わってしまうのではないか。
- 52) 参加者が会場の雰囲気気に入らなく発言している。スタッフがきちんと注意をして欲しい。気に入らないなら今日は帰る等して欲しい。
- 53) 久しぶりに来た人が喜んで帰っていくことができるのが、ハートフレンズ。
- 54) 友達がほしいから来たのが、参加のきっかけ。
- 55) ルールを守らない人がいる。フリースペースに参加することが社会性を身につけることのきっかけになると思う。
- 56) 入院中で外出許可がでたので、ハートフレンズに参加した。参加を止められなかった。家だけに帰るより、ハートフレンズに参加したほうが良い。そういうのがいい。
- 57) 誕生日会をやりたい。祝ってほしい。
- 58) 57) の意見に対して、祝ってほしくない。プログラムはないのがハートフレンズのよいところ。イベントは年2回(クリスマス会、そうめんパーティ)でいい。
- 59) 参加者より、「ハートフレンズに集まる人はみんな仲間と言っているが、お互い住所も名前も知らない薄っぺらい関係。私が死んでもハー



## 精神障害者フリースペースにおける『居場所の言語化』の必要性

トフレンズの人は知りようがない」と言われた。

- 60) 住民や名前、疾患名等をお互いに知らない間柄なので喋りやすいところがある。電話番号や住所を教えたから友達になれるのか疑問がある。
- 61) 重い話をする参加者への対応、参加中ずっと「自殺したい」「リストカットした」等、この後が不安になることあった。
- 62) 重い話は聴くことのみでよい。本人が辛いことを話してもらい受け止めて理解する。理解してくれる人がいるという安心感を得られるはず。
- 63) 料理をつくることを企画したい。話すだけではつまらない。
- 64) 飲み会という機会はないので、飲み会の企画の願望がある（雰囲気味わいたい）⇒のちに、仲間の会が出来て、有志で飲み会に行くようになった。最初のうちはスタッフが同行した。
- 65) 保健所の一面とハートフレンズでの一面が異なる。
- 66) 1人になると気持ちが落ち込むことがある人がハートフレンズにいる時間は落ち着く。

### 【ボランティアスタッフ（約10名）】

（江南保健所の精神保健福祉ボランティア養成講座修了生で、精神保健福祉ボランティアグループ「あい・愛」に所属しているボランティア。  
年齢：30代～70代。性別：男女。）

- 1) 利用者の中には疑似的な家族を求める方もいる。
- 2) 困ったことに対しては、第3者の加入よりも当事者間の話し合いによるコミュニケーションと合意が必要。
- 3) 重い話の受け止め方（メンタルヘルス）、定期的に専門家を囲む会実施したい。
- 4) 精神保健福祉の講座を受講して参加しました。Oさんのお話しに感銘を受けて、ハートフレンズに参加したのが理由です。最初は何をすればいいのか戸惑うこともあったけれど、今ではみんなから元気ももらっている状態です。他にも様々なボランティアに関わっていますが、ハー

### 三 橋 真 人

トフレンズにはハートフレンズの色があるので、いろんな楽しみ方があると感じています。

- 5) 話をするのが苦手だったけれど、ハートフレンズに来て、話を聞いてくれる人が多くいて、もっと人と話を行いたいと思いました。自信が持てた反面、今はみんなの意見を聞くことができる、聞き上手にならなきゃと思っています。
- 6) 当事者同士で悩みを相談しあっている様子や、当事者が家族にアドバイスしている様子も見られる。
- 7) 相手が求めている「求め」と「望み」に応える兼ね合いが難しい。
- 8) ボランティアにとっての安らぎの場になっているように思う。
- 9) 来なくなった人がいるときの対応（良い方向ならよいが、落ち込んでいる人がいたらフォローしたい。どんな役割がフリースペースで出来るか悩む。
- 10) 足が遠のいていた人も安心する場所として目を向けるようになってきた。（居場所としての認識）
- 11) 参加者が知り合いを連れ来る状況がある。
- 12) 終了時にゲーム感覚で「ひとりひと言」をするようになった。発言したくないときはパスすることも認める。（「ひとりひと言」が利用者の中には早く帰ってしまう一因となっている）。
- 13) 意見の少数の人への配慮をどうするか。この考え方を大切にしていく。
- 14) 泣きながら来所される参加者あり。「無縁社会」「死」について話をするにしている人がいた。
- 15) 編み物教室をするようになった。また点字教室を開催した。編み物教室を開催したことによって、教えてくれる当事者の方が体調が悪くなったケースあり。（プレッシャーを感じていた）
- 16) 参加者が1対1を求めてくる、特別扱いを希望する印象がある。距離を考えつつ、聞ける範囲で対応をしていく。
- 17) 地震などの災害が起きた時の対応、避難所の確認を行う。

精神障害者フリースペースにおける『居場所の言語化』の必要性

- 18) 200 回記念のパーティーをするか検討。200 回記念を開催決定。
- 19) 参加者の過呼吸対応
- 20) 当事者の衛生面についての伝え方（洋服などの汚れなど）
- 21) 参加者同士の恋愛について、恋愛感情について今後どうしたらよいのか。ほほえましいが……。なるようにしかならない。
- 22) 何も話さない人への対応について、苦痛に感じているのかもしれないので、気にかけている姿を見せる。
- 23) 参加者にはハートフレンズは満足してもらえる場所なのか改めて考えることがある。
- 24) 言葉のセクハラ問題とボディータッチ、慣れてきたこともあるのか人が見てもお構いなし。（本人が主張、周りがフォロー）
- 25) ハートフレンズが慣れてきたこともあり、その行為がどこまで受け入れ可能かハートフレンズを試しているのではないか。今まで閉じこもりがちだったので、ハートフレンズで欲求などが開放されているのでは。しかし、今の社会のルールをハートフレンズで伝えていくこと必要。
- 26) ハートフレンズ内で当事者同士が連絡先を交換していることあり、お互いがそれでよければいいが、断れない人がいる場合は周りのスタッフがフォローする必要があるのではないか。
- 27) 傾聴についてももう少し学びを深めたいが何か機会が設けられないか。
- 28) ボランティアより、自宅付近でハートフレンズの参加者に会うときがある。知らん顔して歩いたら、にらまれて怒鳴られた。自宅付近ということもあり怖くなっている。（⇒怖い思いをしてまで続けるものではない、今回も個人のとらえ方ではなくてみんなの問題としてとらえる）
- 29) 普段からプライベートは教えない。
- 30) ハートフレンズは変わらない場所、いつ来ても同じところ、これ以上にもこれ以下にもならない。それがハートフレンズのコンセプト。

### 三 橋 真 人

(⇒同じことをしていてよいのか、迷いの確認)

- 31) ハートフレンズは図書館のようなもの。人が少ないからといって無くしてよいものではない。今必要なくても必要としてくる時期がそれぞれにある。
- 32) 参加者から。カラオケをしたいという要望があった。ハートフレンズ内で歌を歌うことについて、当日参加されている方に聞いて要望があれば歌う。
- 33) 写真が趣味の参加者がいる。写真を撮ることへの問題について、許可なく撮ってしまうので本人が相手に写真を撮ってもよいかを許可をしてからにするように注意することに。
- 34) 最後の片づけの掃除について、全体で使った空間なので、全員で片づけをした方がよいということで決定。(全員に呼びかける)
- 35) あい・愛(精神保健福祉ボランティアグループ)の会員が入らない、他のフリースペースと兼務していることある。(あい・愛には1年1人増やす計画あり)
- 36) 6年目ということで疲れもでてきている。この状態で続けることについて確認をしていく必要があるかも。
- 37) 毎週あることがポイント、この日この時間にあるんだということ(集いの場所)居場所(安心)の意義。
- 38) 儲からないところにニーズがある。ハートフレンズがなくなるとその人の居場所がなくなる。ニーズはある。
- 39) 引き算の生活の考え方が重要、何を残していくか。
- 40) ハートフレンズの意義や意味について、悩むところがある。
- 41) 人を育てつつ、人を育てることを重点課題。
- 42) ハートフレンズの参加者もそうだが、関わってくれる人(ボランティア)を増やすこと大切である。
- 43) 当事者がボランティアになりたいとの意見あり。しかし、当事者が会議の場にいると個人情報が出れるのではないかと心配。後日検討し

精神障害者フリースペースにおける『居場所の言語化』の必要性

- ていく。当事者がボランティアになりたい件について、あい・愛の会員ではなく、ハートフレンズとしてのボランティアとして位置付ける。
- 44) 江南市で始まったフリースペース「Honwaka」のボランティアが見学。ハートフレンズとHonwakaが両者ともにフリースペースのため、参加者の中でどのような違いがあるのか理解しにくい状況で興味を示している。
- 45) 専門家にしか分からないことは助言せずに話を聞くことを徹底する(薬などの効用等は口出しせずに聞く)。
- 46) 昔から参加されていた「自殺したい」等と言っていた方がそのようなことを発言しなくなった。長い目で見ていくことがとても大切だと感じた。
- 47) ラジカセ購入の希望があり、ハートフレンズの補助金でラジカセを購入した。
- 48) 当事者間(統合失調症のある人と、アスペルガー症候群のある方)で「あなたは問題児なんだからしっかりしなさい」という言葉をかけている場面があった。その後、友人関係が硬直してしまった。本人のことを思って伝えているつもりがストレートに発言して空回りの状況(障害特性の異なる方同士の難しさ)、少し距離を置くように助言した。
- 49) 当事者の方が頻繁に各相談をしている場面があった(当事者同士でピアサポートを行っている)。
- 50) 参加者からフリースペースに行く意味があるのか、行くところがあるという意味(同じことを続けているのではといわれることあり)。
- 51) 当事者でハートフレンズに参加するのが日課になっている、来ないと体調を崩してしまうという方いた。(毎週金曜日は大切な日)。
- 52) 新しい参加者に対してどこまで話の質問をしていいのか悩むときがある。
- 53) ハートフレンズの目立つ旗をつくりたい。(記念で写真を撮るとき等に使用、バザー使用)

### 三 橋 真 人

- 54) 精神障害者にとって、ハートフレンズに来ること自体が大きな1歩(大きな仕事)、そう思えるまでに10年以上かかった。
- 55) ハートフレンズは家族に障害を抱えている方が落ち着くことできる場所(当事者もその家族も)。
- 56) 参加していた当事者が、最初口数が少なかったが、最近はいろいろな人と関わるができるようになり、お手伝いもしてくれる。

#### 【関係機関スタッフ】

(江南保健所、江南市役所、江南市社会福祉協議会、就労継続支援B型事業所しらゆりワーク、愛知江南短期大学教員)

- 1) ハートフレンズ以外にも近隣のフリースペースに顔を出しています。それぞれの良さがあるなと思います。まだ最近き始めたので、もっとみなさんの顔と名前が一緒になるように活動していきたいです。
- 2) メンバーさんの中には、月曜日から木曜日は、しらゆりワークを利用して、金曜日はハートフレンズに行く、というように使い分けをしている人もいます。それはそれで、選べるということなので良いと思う。
- 3) ハートフレンズは全国的にも珍しい協働して立ち上げられたもの。
- 4) 社協のボランティア相談で「一人暮らしで寂しい、話を聞いてほしい」と相談に来たのでハートフレンズを紹介した。
- 5) 津島市社協の職員がハートフレンズの見学。毎週開催の意義を聞きに来た。
- 6) ハートフレンズの状態について、良い時の評価だけではなく、悪い時の評価もする必要がある。
- 7) 江南保健所管内での交流活動計画(保健所、各市町役場、各市町社会福祉協議会、管内のフリースペース、主に精神障害者を対象とした各事業所、家族会、精神保健福祉ボランティア団体など)平成27年7月実施。

## 謝辞

今回、本論文を執筆するにあたり、多くの方々の協力を頂いた。ハートフレンズの利用者の皆様やその家族の方々、江南保健所、江南市役所、江南市社会福祉協議会、しらゆりワーク、愛知江南短期大学、ボランティアグループ「あい・愛」の皆様、そして、根気強くご指導くださった峰島厚先生に深く感謝を申し上げたい。

本論文は、ハートフレンズの設立時から尽力され、平成29年7月23日に急逝された、太田志磨子氏に捧げたい。

## 参考文献

- 東貴宏・小泉宏和「地域生活支援センターは障害者自立支援法によってどのように変わったのか—東京都地域生活支援センター連絡会の実態調査より（第2報）」『病院・地域精神医学』53(2), 2010年 73-75.
- 萩原浩史「精神障害者と相談支援—精神障害者地域生活支援センターの事業化の経緯に着目して—」『Core Ethics』8, 2012年
- 萩原浩史「三障害ワストップをめぐる相談支援体制の再編—大阪府の場合—」『Core Ethics』12, 2016年
- 林芳博「地域生活支援事業の現状と課題—埼玉県における実施例をもとに」『医療』61(3), 2007年 195-200.
- 乾達『統合失調症からの回復のヒント』白澤社 2014年 186.
- 川喜田二郎『発想法—創造性開発のために』中公新書 1967年
- 川喜田二郎『続・発想法—KJ法の展開と応用』中公新書 1970年
- 吉川武彦『「こころの病」事始め』明石書店 1998年 221.
- 郡山昌明・志水田鶴子・広庭裕・ほか「精神障害者の地域生活の在り方について—相談支援事業所+らいふの実践からの考察」『仙台白百合女子大学紀要』13, 2009年 29-43.
- 三橋真人著 ハートフレンズ編『心病める人たちの居場所づくり活動と理論—ハートフレンズの地域生活支援4年間の歩み—』NSK出版 2012年
- 中澤正夫『精神保健と福祉のための50か条』萌文社 2006年 70-72.
- 大野和男「第Ⅱ章 日本精神保健福祉士協会の発展と歴史的課題」日本精神保健福祉士協会50年史編集委員会『日本精神保健福祉士協会50年史』日本精神保健

三 橋 真 人

福祉士協会 2014年 68.

栄セツコ「精神障害者の地域生活支援—障害者自立支援法施行に伴う精神障害者地域生活支援センターの移行に関する一考察」『桃山学院大学総合研究所紀要』34(1), 2008年 57-71.

社会福祉法人全国精神障害者地域生活支援協議会 2009年:139

富田昌吾「精神障害者の居場所事業はなくなっていい事業なのか」2012年(2016年7月25日取得)

<http://homepage2.nifty.com/totutotu>

谷中輝雄『精神障害者の生活の質の向上を目指して 全精社協10年の歩み』やどかり出版 2000年 15.

全国精神障害者地域生活支援協議会(2009)「第2章精神障害者地域生活支援センターのその後の状況把握調査 集計及び分析結果」『精神障害者の地域生活を支える地域活動支援センターと就労を中心とした個別給付事業との連携のあり方に関する調査研究報告書』2009年(2016年7月25日取得)

<http://www.ami.or.jp/assets/chousa03.pdf>